

「生死の実相を知るならば〈青春は美しく、老いも美しく、死もまた美しい〉と
思えるようになる」

「死をのり超えた人の生き方は明るい」

「末期患者には、激励は酷で、善意は悲しい。説法も言葉もいらぬ。きれいな青空のような瞳をした、すきとおった風のような人が側にいるだけでいい」

死を忌むべき悪ととらえ、生に絶対の価値を置く今日の不幸は、誰もが必ず死ぬという事実の前で、絶望的な矛盾に直面することである。

私が納棺の現場で死に往く人や死者たちから教わった死の実相は、全く違った美しい世界であった。特に「いのちのバトンタッチ」の大切さを教わった。

そんな話を映画「おくりびと」のエピソードや葬式の現場での体験談を交えてお話できればと思っています。

公開講演会

いのちのバトンタッチ

——映画『おくりびと』によせて

青木新門

12/5(土) 16:20-18:00 東京大学安田講堂

[略歴]

1937年、富山県(下新川郡入善町荒又)生まれ

早稲田大学中退後、富山市で飲食店「すからべ」を経営する傍ら文学を志す。吉村昭氏の推挙で『文学者』に短編小説「柿の炎」が載るが、店が倒産。

1973年、冠婚葬祭会社(現オークス)に入社。専務取締役を経て、現在は顧問。

1993年、葬式の現場の体験を『納棺夫日記』として著しベストセラーとなり全国的に注目される。

著書に『納棺夫日記』、小説「柿の炎」、詩集『雪道』、童話『つららの坊や』、チベット旅行記『転生回廊』など。なお、『納棺夫日記』は1998年に米国で“Coffinman”と題されて英訳出版され、中国語、韓国語でも翻訳されている。また2008年に『納棺夫日記』を原案とした映画『おくりびと』がアカデミー賞を受賞して再び注目される。現在は主に、著述と講演活動。

主催：東京大学グローバルCOE「死生学の展開と組織化」